

| 整理番号 | 章節 | 日本語版頁 | 日本語版における翻訳 | 英語原文 | コメント |
|------|--------------|-------|---|--|--|
| 1 | 謝辞 | ix | 時代解釈に関してきわめて刺激的な意見交換ができたことを | for interpretations of the period with <u>which it</u> has been deeply stimulating to interact. (p. x) | 【指示語 (代名詞・関係詞)】この前文までに指示内容はなく、itはperiod、whichはinterpretationsである。この二つ (時代とその解釈) がinteractすることを指摘する、社交辞令にとどまらない箇所。試訳「たえず解釈との対話を誘ってきた時代をめぐる解釈に関して」 |
| 2 | 参照、引用、翻訳について | x | 一八世紀の版からフランス語やイタリア語を引用する際には、 <u>現代の綴りとアクセントに従った</u> 。 | [...] <u>contemporary</u> spelling and accentuation (p. xi) | 【文脈理解】この直後に、逆接でin some cases, however, I have used modern editions and their orthographyとつながる文脈をふまえると、contemporaryの理解が正しくない。「現代の綴りとアクセント」ではなく「その時代の綴りとアクセント」。次文では逆接詞howeverの訳出が省かれてしまっている。 |
| 3 | 序文1 | 1上 | 彼らは、壮大なスケールの物語として啓蒙の歴史を書き、ギボンの著作にとっても重要な存在となった著者たちである。 | a series of authors who wrote Enlightened histories on a grand narrative scale, <u>were known to Gibbon</u> and were important in his own work (p.1) | 【訳し忘れ・脱落】were known to Gibbon |
| 4 | | 1下 | したがって私は、十分に配慮しつつも、一定の規範を確立する存在としてこれらの著者たちを扱う。もっとも、ギボンはそうした規範に従うかもしれないし、従わないかもしれない。 <u>一連の規範は</u> 、ギボンが感じた何らかの同調圧力を示すものというよりも、むしろ歴史家にとって有用な解釈上の道具立て <u>だったのである</u> 。 | It follows that, with due caution, I treat these writers as establishing norms to which he may or may not have conformed. <u>This is</u> an interpretative device useful to <u>the historian</u> , rather than a historical statement about any pressures to conform which he may have been under. (p. 1) | 【文脈理解、指示語 (代名詞)、時制】This isの主語は単数で、時制は現在形である。また、the historianはギボンではなくポーコックであろう。試訳「したがって、勇み足は慎みながらも、わたしは、これらの著者たちに関しては、ギボンが取捨選択した標準的モデルをつくりあげた存在として扱うことになる。このように扱うからといって、これは、ギボンがさらされていた可能性のあるプレッシャーをめぐる歴史的言明ではない。このような扱いは、歴史家にとって役立つ解釈上の工夫なのである。」 |
| 5 | | 2上 | 約十二世紀にわたる歴史 | covering <u>the eleven or so</u> centuries from Constantine to Charles V in the case of Robertson, (p.2) | |
| 6 | | 3上 | 国家としてのロシアはヨーロッパ化されてきており、中国の国境に至るまで中央アジアの征服に乗り出していると考えられていた。最終的に <u>ロシアは</u> 、ローマ帝国以後のヨーロッパに幾度も侵攻したステップ地帯の遊牧民を服従させ、「野蛮人」の語の意味をゴート族やゲルマン人以外へと拡大したのである。 | The Russian state was believed to have been Europeanised, and to have set out on the conquest of Central Asia as far as the borders of China, leading to the final subjugation of <u>the steppe nomad peoples</u> who had so often invaded Roman and post-Roman Europe, <u>enlarging the meaning of the term 'barbarian' beyond its Gothic and Germanic associations.</u> (p. 3) | 【文脈理解】第4巻で明確に論じられているように、ポーコックのこの連作にあって、「野蛮人」の語の意味をゴート族やゲルマン人以外へと拡大した存在とされているのは、「ステップ地帯の遊牧民」である。(enlargingの意味上の主語は、the steppe nomad peoples。) |
| 7 | 序文2 | 4下 | <u>それは</u> 、アルナルド・モミリアーノの記憶に捧げられるが、 <u>先駆者としての</u> フランコ・ヴェントゥーリの記憶にも捧げられる。 | There is a second theme to be pursued in this book. <u>It</u> is dedicated to the memory of Arnaldo Momigliano, as <u>its predecessor was</u> to that of Franco Venturi; (p. 4) | 【指示語 (代名詞)、時制】it, itsの指示内容 (=this book) をとらえ損ねている。「前巻がフランコ・ヴェントゥーリの記憶に捧げられたように、本巻は、アルナルド・モミリアーノの記憶に捧げられる。」 |

| | | | | | |
|----|-----|-----------|---|--|---|
| 8 | | 5上 | 過去の一連の状態を再構築するうえで、博学は主要な役割を果たした。しかし、その再構築は、初期近代における教会同士、または教会と国家、国家と社会の激しい論争からも生じ、そのなかで各々の論者は、 <u>既存の様々な概念</u> に自らの権威をつなぎとめようとした。 | Erudition was a principal actor in these successive reconstructions of past states, but they arose also from the intense controversies of the early modern period between church and church, church and state, state and society, in which each contestant sought to anchor its authority in <u>a different image of things formerly existing</u> ; (p. 5) | 宗教論争では、権威の根拠となる過去の事物や出来事をめぐっても解釈の争いがあったという趣旨の指摘。a different image of things formerly existing は、過去に存在したものについて解釈が争われたという事態を表現しているから、「既存の様々な概念」は適切でない（そのほかの箇所も含めて、本書には、現在分詞はすべて現在形で訳出しなければならないという（適切でない）前提があるために、現在分詞によって動作とその主体を示すという文法上の関係をとらえ損ねている箇所がある）。試訳「過去のさまざまな状態を連なる流れとして再構築するにあたっては、エルディションの営みが中心的な役割を果たした。しかし、過去のそうした再構築は、初期近代における教会と教会のあいだ、教会と国家のあいだ、国家と社会のあいだの激しい論争からも生じた。そこでは、それぞれの論争当事者は、自らの権威を主張するにあたって、過去に存在したものの異なったイメージに根拠を求めようとした。」 |
| 9 | | 5下 | また、こうしたスケールの語りの構築においては哲学がきわめて重要な貢献をなすと考えられるが、それは哲学者が実践した課題とは言えない。 | <u>It is premised</u> , however, that the task facing each historian was the construction of an ‘Enlightened narrative’[...]; <u>and that the construction of narrative on this scale</u> , while a task to which philosophy may make profoundly important contributions, <u>is never one which the philosopher as such undertakes</u> . (p. 6) | ポーコックはここで、以下の「序説」の叙述で前提とするものをthat節で併記している。（１）「と考えられる」では、ポーコック自身の前提なのか、一般的に論じられていることなのか、わかりにくいのではないだろうか。（２）「と考えられる」中味の中心は、「哲学が...貢献をなす」点ではないので、この位置ではおかしい。（３）時制も正しくない。試訳「また、こうしたマクロなスケールの語りを構築する作業にあたっては、哲学がきわめて重要な貢献を果たしうるが、そうした構築は、哲学者自身がおこなう作業ではないという点も前提とする。」 |
| 10 | | 5下～ 6上 | モミリアーノの定式が意味しているのは、哲学はあくまで啓蒙の歴史叙述を構成する三つの要素の一つにすぎないということ、したがって <u>啓蒙の歴史叙述</u> は哲学史に伴う現象ではないということである。本書では、 <u>啓蒙の歴史</u> とは、歴史家が統合せざるをえなかった様々な語りの歴史であると主張する | Momigliano’s formula implies that philosophy is one of three components of Enlightened historiography, <u>whose history</u> is therefore not epiphenomenal to the history of philosophy. This book asserts that <u>its history</u> is the history of the narratives which historians have been impelled to put together, (p. 6) | 【指示語（関係詞・代名詞）】 whose history, its historyはなんの歴史かと言えば、historiography（ないしはEnlightened historiography）の歴史である。「モミリアーノの定式が意味しているのは、哲学は、あくまで啓蒙の歴史叙述の三要素の一つにすぎないということである。それゆえ、歴史叙述の歴史は、哲学の歴史に従属するわけではない。本書は、歴史叙述の歴史とは、様々な語りの歴史であると主張する。歴史家たちにはそうした様々な語りをまとめあげることが求められてきたのである」 |
| 11 | 序説1 | 8下 | とはいえ歴史家は今や、 | Since very early times it had been recognised that there might be more than one account of the same event, and that the historian might have to declare which he took to be true or declare the impossibility of deciding. He <u>now</u> ceased to appear in the role of actor or witness, and became a commentator on... (p. 8) | 【文脈理解】内容をふまえれば、前文から順接でつながっているのに、「とはいえ」は不適切。 |
| 12 | | 8下 | ギボンに依然として、一八世紀初期の <u>懐疑論争</u> に対する応答が続いていた。 | <u>The pyrrhonist controversy</u> of the early eighteenth century was one to which Gibbon was still responding. (p. 9) | 厳密には「ピュロン主義をめぐる論争」。20ページ上にも同様の訳出あり。 |

| | | | | | |
|----|-----|-------|--|--|---|
| 13 | | 9上 | 古代の統治者と市民は好戦的な人間とみなされ、戦争は制御することも予見することもできない領域として認識された。 | Ancient rulers and citizens <u>were</u> a warlike set of men, and war was recognised as a domain of the uncontrollable and unpredictable, (p. 9) | 「とみなされ」？ 古代の統治者や市民は、戦争をする集団であり、彼らは戦争をuncontrollable and unpredictableとrecogniseした、という議論。日本語として推敲するなかで生み出されたと推定されるこうした誤りは、ほかにも見られる。 |
| 14 | | 9上～9下 | 行為の語りは謎を伴う語りとなったが、それはランダムな偶然性の謎だけではなく、偶然性に直面しつつ決定と行為がいかになされたかについての謎をも意味する。 <u>行為が成功したか、それとも悲惨な結末に至ったか——ここでは典型的なものが同時に不可解なものになる——が、運命と相互作用しつつ、人間の心の奥底において形をなした。</u> | The narrative of action became a narrative of mystery, meaning not only the mystery of random contingency, but the mystery of how decision and action were framed in the face of contingency. Whether action had proved successful or disastrous, <u>that which was exemplary about it was</u> at the same time <u>that which was arcane</u> , formed in the depths of the human heart as it interacted with fortune. (p. 9) | 【指示語（関係詞）、文脈理解、構文理解】人間の意思決定にかかる謎や不可思議が話題にされたのちの一節。第二文の訳は、構文を理解しそこねているように思われる。第二文は、指示語や関係詞の多い、とてもわかりにくい文章だが、that... was that...がSVCとして文の基本骨格となっている。「行為をめぐる語りは、謎をめぐる語りとなった。ここでいう謎とは、予測のつかない偶然という謎だけでなく、偶然性を前にして決定や行為がどのようにかたちづけられたのか、をめぐる謎も意味した。行為は成功をおさめたか、破滅に至ったかをめぐって模範となったものは、同時に、不可解な謎めいたものであった。それは、人間の心が運命に働きかけてそれに働きかけられるなかにあって、その心の奥底においてかたちづけられた。」 |
| 15 | | 9下 | 「革命の時代」に至る新古典的文化 | neo-classical culture down to the Age of Revolutions (p. 10) | ポーコックの理解において、新古典文化や啓蒙は、革命の時代とはあくまで断絶しているの、「革命の時代」に至るまでの新古典文化」がベターであろう。 |
| 16 | 序説2 | 11上 | 司法制度 司法体系 司法 | jurisdiction (p. 11) | 三権のひとつとしての司法や裁判の話をしているわけではなく、権力や権威に置き換えることのできる意味で使われている言葉。のちの箇所（19ページ上）では「支配」という、より適切な訳語が採用されている。 |
| 17 | | 11上 | 司法の当事者としての市民的権威の名において | in the name of the <u>civil</u> authority as party to <u>that jurisdiction</u> , (p. 11) | 【指示語（代名詞）】指示語thatが訳出されていない。また、「市民的権威」という表現は、現代日本語ではデモクラシーを含意してしまうため、原文とは意味が異なってしまう。「教会の支配権にあずかる世俗権力の名において」 |
| 18 | | 11下 | 教会史は、歴史叙述の語彙を豊かにするために寄与し続けた（市民的歴史が聖史に道を譲らない <u>限りにおいて</u> ）。 | Ecclesiastical history continued – <u>within limits beyond which</u> civil history gave way to a sacred – to contribute to the enrichment of the historiographic vocabulary. (p. 12) | 【指示語（関係詞）】「教会史は——世俗史がその先は聖史に委ねていた境界線の内側で——歴史叙述の語彙を豊かにする貢献を続けた。」 |
| 19 | | 11下 | 語りの領域において、教会史は教会人の行為を語るための慣用表現を生み出し、そこでは、模範的行為を示す聖人伝や啓発書、様々な物語などで用いられる言葉が使われた。そうした物語のなかでは、記録された行為が、人間社会としての教会の構造——必然的に神的なものとの相互作用する——に影響を及ぼし、また教会と世俗的権威や市民社会との相互作用にも影響を <u>与える</u> 。 | In the area of narrative, it developed its own idioms in which the actions of churchmen might be recounted <u>in terms</u> extending from the hagiographic and the edifying which were its version of the exemplary, to narratives in which the actions recorded had effects on the structure of the church as a human society – interacting necessarily with the divine – and on its interactions with secular authority and civil society. (p. 12) | in termsここでは「言葉」だろうか。which were its version ofの訳は省略されている。試訳「語りの領域において、教会史は、教会人の行為を語るために、自分たちの慣用表現を生み出していった。そのような語りは、教会史版の模範語りに相当する聖人伝や教訓話というかたちでなされることもあったし、それだけでなく、（神の国と必然的に関わりをもつとはいえ）ひとつの人間社会としての教会のしくみに影響を与えた行為を記録する語りのかたちでなされることもあった。さらには、教会と世俗権力・市民社会の関わり方に影響を与えた行為を記録する語りの場合もあった。」 |

| | | | | | |
|----|-----|-------|---|--|---|
| 20 | | 12上～下 | 不本意にも聖史は近代的な人類学の生みの親だとみなされたが、 | Sacred history was <u>inadvertently</u> the parent of modern anthropology, (p. 13) | ほかの著作にも見られる、ポーコックの視点からの断定命題であり、「とみなされた」は不要。「聖史は、意図したわけではないが、近代の人類学を生みだした」。 |
| 21 | | 12下 | さらに独自のかたちで過去を図式化・時系列化するマヤとインカの体系も加わった。 | halfway through the second Christian millennium, however, their number was increased by the discovery of Chinese and Hindu chronologies (radically unlike one another) and by <u>what survived of</u> Maya and Inca systems of schematising and dating the past. (p. 13) | 【訳し忘れ・脱落】 what survived of 反対に「独自のかたちで」は原文にはない挿入。 |
| 22 | | 12下 | これらを聖書年代学的な物語と結びつけることは難しかったし、ましてそれに適合させることは困難を極めた。「主よ、汝の言葉には中国やペルーよりも価値がある」と書いた讚美歌作者の知識を、彼の主張と統合することも困難だった。 | These were much harder to connect with, let alone fit into, the narrative of Biblical chronology, and the hymnodist who wrote ‘Thy Word, O Lord, we value more than China or Peru’ <u>knew with what he was contending</u> . (p. 13) | どのように誤読しているか判別できなかった箇所。「こうした異教の年代記を、聖書の年代記の語りと結びつけることは難しく、まして取り込むことは困難を極めた。「主よ、汝の言葉には中国やペルーよりも価値がある」と記した賛美歌作者は、なにと争っているか理解していた。」 |
| 23 | 序説3 | 14上 | 世俗と教会の <u>首長と組織</u> | Lay and ecclesiastical <u>lords and corporations</u> , (p. 15) | 「聖俗の貴族や団体」が標準的な訳であろう。 |
| 25 | | 16上 | イングランド史やフランス史、ヨーロッパ史、さらには教会史——依然として書かれ続けた——さえも、複雑な制度や社会、あるいは「想像の共同体」の歴史であった。これらは何世紀にもわたって存続し、多様な状態を通過してきたと考えられていたため、碩学やその論争相手はそれらを再構築しようとした。それらを作り上げた「言語、法、信仰」の過去の状態とその変化が描かれなにかぎり、その歴史は書かれえなかったのである（したがって、現在におけるそれらの権威の基礎についても論じえなかった）。しかし、こうした要素のそれぞれが政治的・宗教的な行為と経験の舞台を変化させつつ存在し続けているという事実は、その歴史を物語の形で書くように促した。 | The histories of England or France, of Europe or even the church, which continued to be written, were histories of complex institutions, societies or imagined communities, held to have existed through many centuries and passed through a diversity of the states of being which erudites and controversialists reconstituted. Their histories could not be written – and the contested foundations of their authority in the present could not be debated – unless the changing conditions in the past of the langue, loi and foi composing them were depicted; but the fact that each of these entities was a continuously existing and changing theatre of political and religious action and experience compelled its history to be written in narrative form. (p.17) | 【指示語（代名詞）】代名詞を代名詞として訳すだけでは、意味が判然としない（ないし誤解してしまう）ように思われる箇所の典型（日本語訳だけを読むと、ほとんどの代名詞が指すのは「イングランド史やフランス史、ヨーロッパ史、さらには教会史」のように思われるが、正しくない）。また、最後の一文の主語であるthat節は、S=each、V=was、C=theatreという構文となっている。 試訳「イングランド史、フランス史、ヨーロッパ史、さらには依然として書かれ続けた教会史ですらも、複雑な複数の制度、複数の社会、複数の想像の共同体のおりなす歴史であった。そうした制度や社会や共同体は、数世紀にわたって存続し、幾多の状態をこれまで経てきたと主張され、古事学者や論争家がそうした過去の状態を再現した。それらの制度や社会や共同体の歴史を書くためには、——そして、それらの制度や社会や共同体の現在の権威の基礎をめぐっては争いがあるが、そうした基礎について議論するためには——、これら制度や社会や共同体を構成する言葉・法・信仰について、過去の変転した状況を描く必要があった。しかし、これら制度や社会や共同体のそれぞれが、政治的・宗教的な行為や経験が演じられる舞台であり、ずっと持続しながらも変化している舞台であるという事実ゆえに、その歴史は、語りのかたちで書かれねばならなかった。」 |

| | | | | | |
|----|-----|-----|---|---|--|
| 27 | 序説4 | 17下 | ロック、シャーフツベリ、アディソンは、「哲学」を学院から排除し、コーヒーハウス、クラブ、客間に移すという目的を共有した。学院では、聖職者によって行なわれる討論の原因となった <u>もの</u> が、後者の場面では、有閑の洗練された紳士からなる会員（おそらくは女性を除外しない）の間での会話の材料となるだろう。このような「哲学」と「洗練」の結びつきにおいて、我々は、哲学を神学から切り離すという啓蒙の目的に出会う（哲学と神学が結合すると、 <u>市民的統治と社会が分裂</u> することが証明されていた）。さらに、哲学と宗教をともに社交的な活動—すなわち、社会の外部では考えることも行動することもできない社会的存在同士の会話—へと変えるという目的に出会う。 | Locke, Shaftesbury and Addison shared the declared objective of removing ‘philosophy’ from the schools, where <u>it</u> was the matter of disputation conducted by clerics, and locating <u>it</u> in coffee-houses, clubs and drawing-rooms, where <u>it</u> would become the matter of conversation among the members (just possibly not excluding women) of a leisured and polite gentry. In this conjunction of ‘philosophy’ and ‘politeness’, we encounter the Enlightened objective of severing the former from theology, in which alliance <u>it</u> had proved capable of disrupting civil government and society, and reducing both philosophy and religion to a sociable activity, a conversation between social beings who could never think or act outside society. (pp. 18-19) | 【指示語（代名詞）】代名詞it (=philosophy) のいくつかが無視されてしまっている。「ロック、シャーフツベリ、アディソンは、「哲学」を学院から排除し、コーヒーハウス、クラブ、応接室に移すというはっきりした目的を共有した。学院では、 <u>哲学は</u> 、聖職者が討論するものだったが、後者の場面では、有閑の洗練された紳士からなる（おそらくは女性を除外しない）メンバーたちが語らうものとなるだろう。「哲学」と「洗練」のこうした結びつきには、哲学を神学から切り離すという啓蒙のめざした目的が見出される。神学と結びつくと、 <u>哲学は、世俗の統治や社会を乱す可能性</u> があることが明らかになっていた。...」 |
| 28 | | 17下 | それは全般的に、「古代の」哲学および一定の歴史的語りの弾劾を導いた。 | It led to <u>a general indictment of ‘ancient’ philosophy, and a historical narrative</u> in which ... (p. 19) | 【文脈読解】前後の文脈をふまえるならば、ancient philosophyとa historical narrativeが同格なのではなくて、a general indictmentとa historical narrativeが同格。「それは、「古代」の哲学に対する広範な攻撃と、...という歴史の語りをもたらしした。」 |
| 29 | | 18上 | 観察から神を演繹した | deduced God <u>and his attributes</u> from... (p. 19) | 【訳し忘れ・脱落】 and his attributes |
| 30 | | 18上 | ヨハン・ヤコブ・ブルッカーの大著において | in the huge volumes of Johann Jakob Brucker, <u>the first great historian of philosophy</u> . (p. 19) | 【訳し忘れ・脱落】 the first great historian of philosophy ポーコックは「哲学史」と「歴史叙述史」の違いを強調しているの、カンマ以下は重要な指摘。 |
| 31 | | 19上 | ヨーロッパが到達した状況 | the condition at which Europe might be arriving <u>in an age to which the metaphor of light was increasingly applied</u> . (p. 21) | 【訳し忘れ・脱落】 in an age to which the metaphor of light was increasingly applied |
| 32 | | 19下 | 精神は対象（物体）によって形成された概念についてのみ思考するという彼の命題 | his proposal that the mind was limited to thinking about the <u>ideas which it formed of objects</u> (p. 21) | 【指示語（関係詞・代名詞）】ここも指示語itが無視されている。「こころは、自らが対象（物体）についてつくりあげた観念について思考するだけにとどまるという彼の提唱」 |

| | | | | | |
|----|--|---------|---|--|--|
| 33 | | 20下 | <p>このような展開は、広義の緩やかな意味での「哲学」によって非常に重要なものとして認識されたが、とりわけ次のような想定が有力だった。すなわち、哲学は対象についての知識を扱うという想定、<u>また</u>様々な学問分野が形を成すにつれて、批評は哲学から文学の部門へと追いやられたという想定である。そこでは、法学のほうが優れた知識をもつと強く主張されていた。</p> | <p>This development was recognised as of great importance by ‘philosophy’ in the broader, looser sense of the term; but <u>so</u> powerful was the presupposition that ‘philosophy’ dealt with knowledge as that of objects, <u>that</u> as the disciplines took shape criticism found itself relegated from the department of philosophy to that of literature. Jurisprudence, it <u>has been</u> powerfully argued, knew better. (p. 22)</p> | <p>【時制、構文理解】so that構文。「広義の緩やかな意味における「哲学」では、このような〔批評を活用する〕展開はとても重要とみなされた。ところが、「哲学」が扱う知識とは対象についての知識である、という前提が強固だったため、各学問分野ができあがっていくなかで、批評は哲学から文学へと追いやられた。〔批評については〕法学のほうがずっと事情に通じていた、という点が強く主張されている。」</p> |
| 34 | | 20下～21上 | <p>こうして、啓蒙にもヨーロッパの歴史叙述にもメタ・ヒストリーが存在するようになった。そのメタ・ヒストリーとは、すべての関連する現象を<u>一定の運動の語り</u>に還元するものである。<u>その語りのなかには</u>、「十八世紀の哲学者による天上の都市」で確立された啓蒙の自然主義から、ロマン主義的で主に東ヨーロッパ的な歴史主義——すべてのそのような歴史的現象をまったく違った形で認識させたもの——<u>まで</u>が含まれる。</p> | <p>There has come to exist a meta-history of both Enlightenment and European historiography which reduces all relevant phenomena to <u>a narrative of movement from</u> an Enlightened naturalism, securely established in the ‘heavenly city of the eighteenth-century philosophers’, <u>to</u> a romantic and largely east European historicism which made all such phenomena incidents in a history quite differently perceived. (pp.22-23)</p> | <p>「ここに、啓蒙や、ヨーロッパの歴史叙述をめぐる、メタ・ヒストリー〔歴史の歴史〕が登場することになった。そのメタ・ヒストリーは、啓蒙の自然主義から、ロマン主義的で東ヨーロッパの要素の強い歴史主義へと向かう運動をめぐる語りのなかに、すべての関連する現象をまとめあげる。その啓蒙の自然主義とは、「十八世紀哲学者の楽園」にて世俗的につくられたものであった。そして、たどりついた歴史主義のもとでは、そういった現象のすべては、まったく違ったかたちでとらえられた歴史のうちに生じた出来事とされた。」</p> |
| 35 | | 21下 | <p>語り争点となるのは、『試論』において我々がアイロニーへの称賛を見いだすところにおいてである。すなわち同書が、期待していたのとは別の方法で行為する人間を観察することに対する道徳的・知的な満足^をを称えるときである。人間本性の不変の原理は、あらゆる啓蒙の歴史叙述の<u>歴史主義的批判</u>——ギボンが『衰亡史』において<u>その説明的価値を見いだしたときに依拠したもの</u>——の標的となっていたが、それは、ヒュームにとってもギボンにとっても、無尽蔵でしばしば反合理的な人間行動の多様性を評価する基準であった。</p> | <p>Narrative is at issue when in the Essai we find praise of irony, the moral and intellectual satisfaction of observing humans acting in ways other than those we expect <u>to find guiding them</u>. <u>The unchanging principles of human nature</u>, target of all historicist criticisms of Enlightened historiography – <u>to which</u> Gibbon in the Decline and Fall resorted when he found them of explanatory value – were, to Hume as well as Gibbon, benchmarks from which to assess the inexhaustible and often counter-rational diversity of human behaviour as displayed in its actions, institutions and belief systems.</p> | <p>【指示語（代名詞・関係詞）】「人間本性」はむしろ多様性を論じられるために用いられた、と指摘される箇所。whichの先行詞の理解がおかしなことになっており、文意が正反対になってしまっている。また、第一文のto find guiding themは訳が省略されている。「『試論』においてアイロニーの称賛を見出すと、語りが問題になってくる。アイロニーとは、人間を導いているであろうとわたしたちがみなす方法とは違う方法で人間が行為するのを観察して覚える道徳的・知的な満足のことである。人間本性という不変の原理は、啓蒙の歴史叙述に対するあらゆる歴史主義的批判によって標的にされたが、ギボンは『衰亡史』においてその不変の原理に説明的価値を見いだして、これに依拠した。…」</p> |
| 36 | | 21下 | ある人が主張してきた | as <u>some have</u> contented | 【単数複数】 |
| 37 | | 22上 | 哲学的気質とは、このようなことを知ること <u>となつたのである</u> 。 | The philosophic temper came to <u>consist in</u> knowing such things as this. | 【訳し忘れ・脱落】consist inが脱落。「哲学的気質は、こうした点〔哲学と歴史、哲学と人間本性の関係など〕は以上のものであると理解することのうちに存するようになった。」 |

| | | | | | |
|----|--|-----|---|--|---|
| 38 | | 22下 | <p>実際のところ「啓蒙の語り」とは、多様に曲がった木材からなる多数の語りが複合したものであった。それはすなわち、法的、宗教的、政治的、および（「習俗の」出現とともに）文化的な組織化を跡づける、我々が「マクロな物語」と呼ぶものであり、過去についての考古学としての博学によって確立されたものである。</p> | <p>The ‘Enlightened narrative’ was in fact a complex of <u>many narratives</u>, variously crooked in their timber: <u>what we are calling macronarratives</u>, tracing the succession of states of legal, religious, political and (with the advent of ‘manners’) cultural organisation, <u>established</u> by erudition as the archaeology of the past;</p> | <p>【単数複数、文脈理解】（１）単数複数に注目すると、what we are calling macronarrativesは、many narrativesを受けていることが分かる。「それは」では「啓蒙の語り」はと読めてしまうため、不適切。（２）序説のここまでの議論をふまえると、establishedの文法上の機能や被修飾語をめぐる理解が適切でない。訳では、「啓蒙の語り」が「博学によって確立された」と読めてしまうが、「過去についての考古学としての博学によって確立された」のは、states of legal, religious, political and (with the advent of ‘manners’) cultural organisationであり、そのうえで、これらの通時的推移を各マクロナラティブが語ったのである。</p> <p>試訳「実際には「啓蒙の語り」は、それぞれに曲がりくねった多くの語りを組み合わせたものであった。その多くの語りは、私たちがここでマクロナラティブと呼んでいるものである。過去についての考古学であるエルディションが、法・宗教・政治のしくみ、さらには（「習俗」の登場にあわせて）文化のしくみがどんな状態だったかを明らかにして、そして、マクロナラティブがそれらの状態の連続した歩みをあとづけたのである。」</p> |
| 39 | | 22下 | <p>そして啓蒙史家の仕事は、新しい水準のマクロな物語において、最大限にそれらを統合することであった。「哲学」という用語は、<u>書き手</u>がこの課題を認識して、それに着手する際の気質を指し示すことができた。それゆえヒュームは、主要な物語史家であった唯一の主要な哲学者として（かつ歴史哲学者とは区別された存在として）、本書の中心人物となるだろう。</p> | <p>and the task of the Enlightened historian was to combine them as best he could at new levels of macronarrative. The term ‘philosophy’ could denote the temper in which <u>he</u> recognised this task and set about it, and perhaps this is why David Hume is a central figure in this book, as the only major philosopher who has ever been a major narrative historian (as distinct from yet another philosopher of history).</p> | <p>heは「書き手」と訳出されているが、the Enlightened historianのこと。また、the Enlightened historianを「啓蒙史家」と訳出すると、現代の歴史家のことと誤解されるかもしれない。「そして、啓蒙期の歴史家がなすべき仕事は、新しい次元のマクロナラティブにおいて、それらをできるだけうまく結びつけることだった。「哲学」という用語は、啓蒙期の歴史家がこの課題を認識して、それに着手する際の気質を表現しうる言葉だった。そして、おそらくはこうした理由ゆえ、デイヴィッド・ヒュームこそが本書の中心人物なのである。彼は、名の知れた語りの歴史家でもあった、唯一の大哲学者だった（しかも、もう一つの〔歴史家と哲学者の結合形態である〕歴史哲学者とは区別される存在である）。」</p> |